

# 鹿児島県下の中世以降の硯とその産地について

～企画展「遺跡でたどる幕末・明治の鹿児島」展示資料から～

黒川 忠広

## はじめに

筆者は、黎明館企画展「遺跡でたどる幕末・明治の鹿児島」と題して、遺跡を視点に近世の鹿児島県を概観した。鹿児島県における近世考古学は、主に薩摩焼を中心とする陶磁器の研究により深化したと言っても過言ではない。鹿児島城やその城下、あるいは御仮屋跡等の発掘調査成果を基に、近世の様相もわかりつつある。だが、鹿児島県における近世の研究は、文献による研究が主流を占め、考古学分野が得意とする「モノ」の研究は必ずしも充実しているとは言い難い<sup>(1)</sup>。その中で、今回の企画展においては、黎明館所蔵の玉里島津家資料の中に良好な硯が含まれていることを知り、これらの内数点を展示する機会を得た。これらには、産地や製作年代が克明に記されており、発掘調査では知り得ることのない資料であった。

そこで、小稿では、企画展で紹介した硯に加え、県内の発掘調査で出土した事例を集成し、その現状を整理することを目的としたい。

## 1 研究史

硯の研究は、全国的視点で研究した水野和雄氏の業績が大きい（水野1985）。水野氏は、石硯を分類するにあたり「2通りの方法がある」として、「石材や石質」「形態や彫刻の仕方」を示し、後者による手法で平面・側面・裏面の特徴を基に分類し、全国の資料をこれに当てはめる作業を行っている。そして、石硯は、「円硯－風字硯－楕円硯－台形硯－長方形硯」と変遷するとまとめた。その後、各地で検討が進められ、九州においては、藤木聡氏による日向の資料が集成され、近世後半に資料数が増加する背景として、「全国他地域と同様に識字層の増加等との密接な関連」を指摘している。さらには、赤間硯や高島硯等の広域流通品を確認するなどの成果も得ている（藤木2010）。

本県における硯の研究は少ない。全国の硯材産地をまとめた石川二男氏は、硯産地一覧と地図を提示し、その中に、「若獅子石」<sup>(2)</sup>として国分市敷根村（現在の霧島市国分敷根）を図表に示している（石川1985）。この他に、甌島に浅見石・遠目石（表中では浅見石を里村とする）を、屋久石（上屋久町宮ノ浦と表記）龍宮石を下甌島、冷泉石を鹿児島県、名柄石を宇検村名柄とそれぞれ紹介している。ただ、残念なことにその出典等が記されておらず、産地調査など、丹念な作業と収集の中で知り得たを多くの情報があったと評価できる。龍宮石については、「石質が粗で作硯されているものは殆どない。筆者の手許にあるものも原石で作硯に値しない石である」とまとめている。

発掘調査報告書においては、まとめて出土する事例は希で、鹿児島（鶴丸）城跡を中心に報告

がなされているに留まる。弥栄久志氏は、鹿児島（鶴丸）城二之丸跡の報告書において、細身で長い・細身で短い・幅広く大きい・幅広く短いという4つの形態分類と、黒色・灰色・茶褐色という3つの色調に分類した。これは、まとまった数量が出土した際に形状と色調によって細分が可能である点を示唆したものである（弥栄編1992）。青崎和憲氏は、浜町遺跡の報告書において、刻書資料から年号・人名を特定する試みを実施した（青崎編2000）。この他に、若宮遺跡D地点の個別記述（長野編2014）において、「赤間硯」と紹介されるなど注意は払われつつも、報告書の個別記述を超えるものではなかった。

## 2 資料

### (1) 遺跡資料

第1～3図及び表1は、県内の硯出土資料及び遺跡一覧である。これで見えてわかるように、出土遺跡の多くが鹿児島（鶴丸）城下にある。遺跡の性格についても、城や侍屋敷、寺院と大別出来、地方では地頭仮屋などの薩摩藩に関連する遺跡からの出土が多い。遺構内から出土している事例は少なく、このことが時期認定をより困難なものにしている。

### (2) 玉里島津家資料

今回の企画展においては、玉里島津家資料の硯の中から、「松影」や「若狭」と背面に刻書が施されている資料等を紹介した。ここでは、これらの中から、鹿児島県の地名と思われる2点を抽出して紹介していきたい。

#### ① 隅州弍川（第4図1）

石材は硬質の頁岩で、黒褐色を呈する。表面縁上面には金が施される。裏面のほぼ全面にはていねいな刻書が施されている。一文字の大きさは、12mm程で均一な刻書である。裏面上部には横書き刻書で「隅州弍川石」、裏面の浅く凹ませた箇所には縦書き刻書で、「文化八年辛未八十一歳老翁隆雲彫刻焉貞正」と施される。

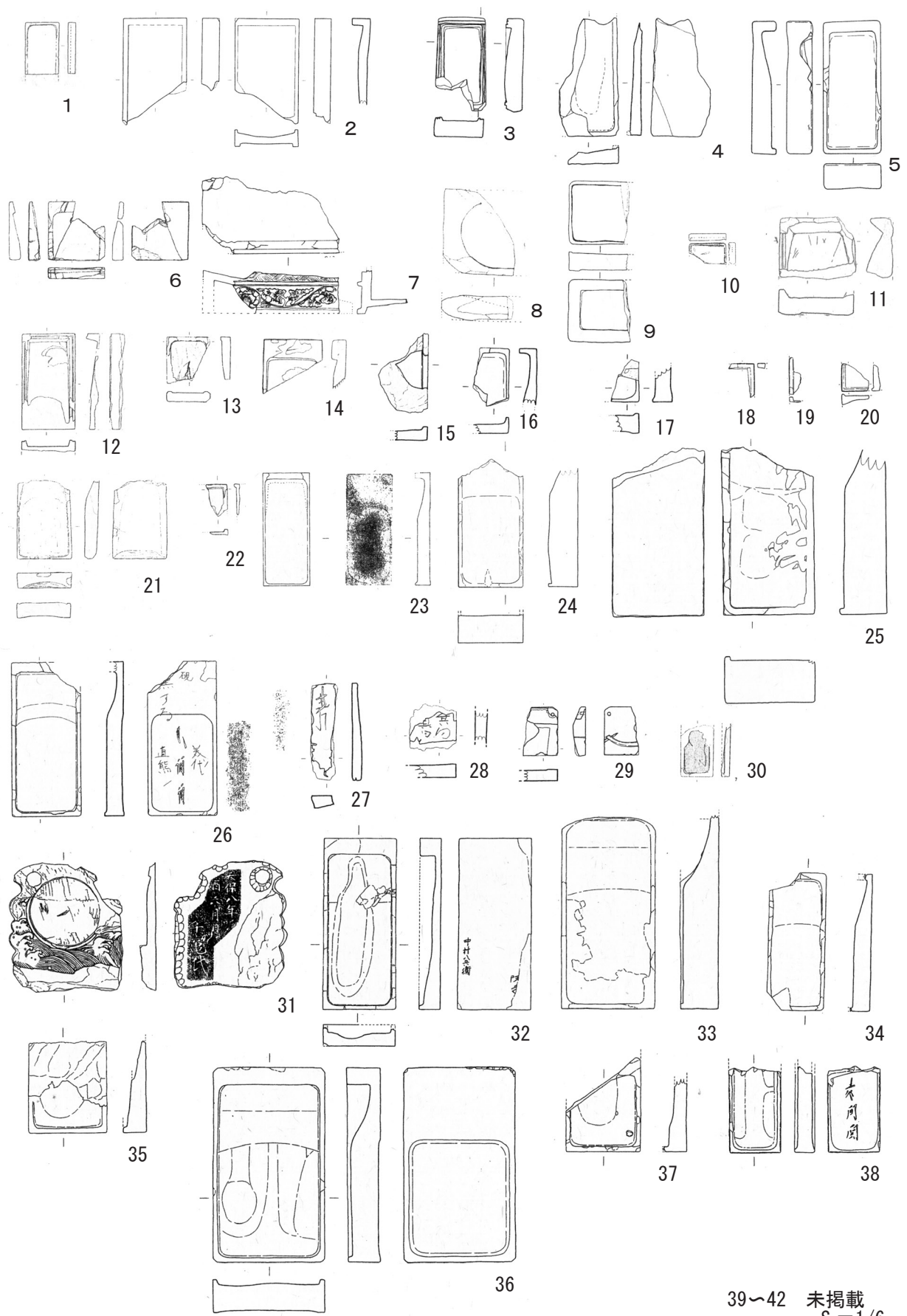
#### ② 隅州若御子産（第4図2）

木製の蓋と収納する革製容器、背面の空隙を充填する材とで構成される。木製の蓋の裏面に「以隅州若御子石文政五年壬午天亮忍」と金文字で記されている。石材は硬質の頁岩で、黒褐色を呈する。

## 3 文献史料

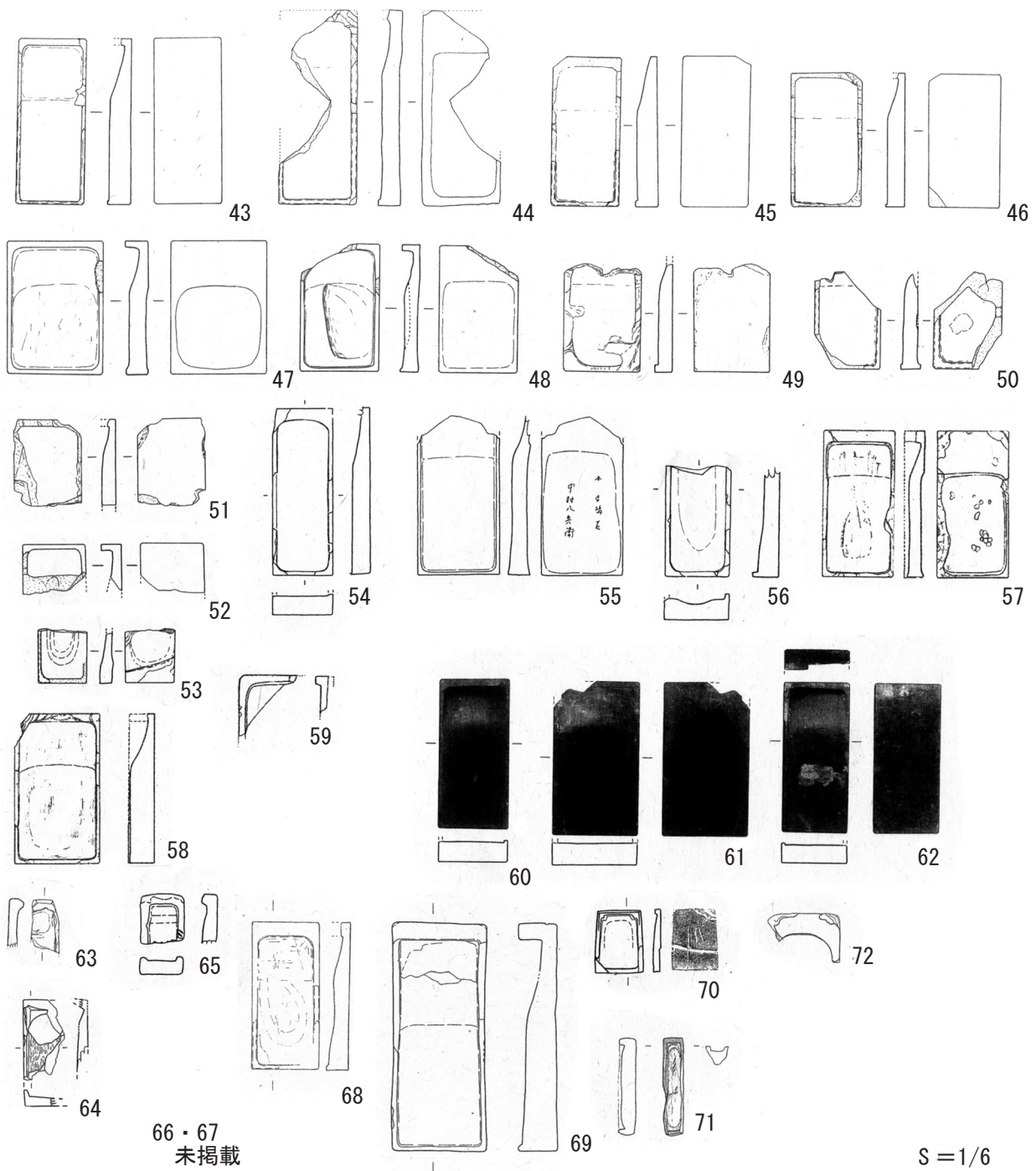
### (1) 三国名勝図会

三国名勝図会とは、江戸時代後期に編纂された薩摩・大隅・日向の三国の旧跡や寺院、名勝や産物等を記したもので、江戸時代の南部九州を理解する上で欠くことのない文献の1つである。これによると、6箇所の硯の産地が紹介されている。土石類として紹介されている文を各々引用しながら紹介していきたい。



39~42 未掲載  
S=1/6

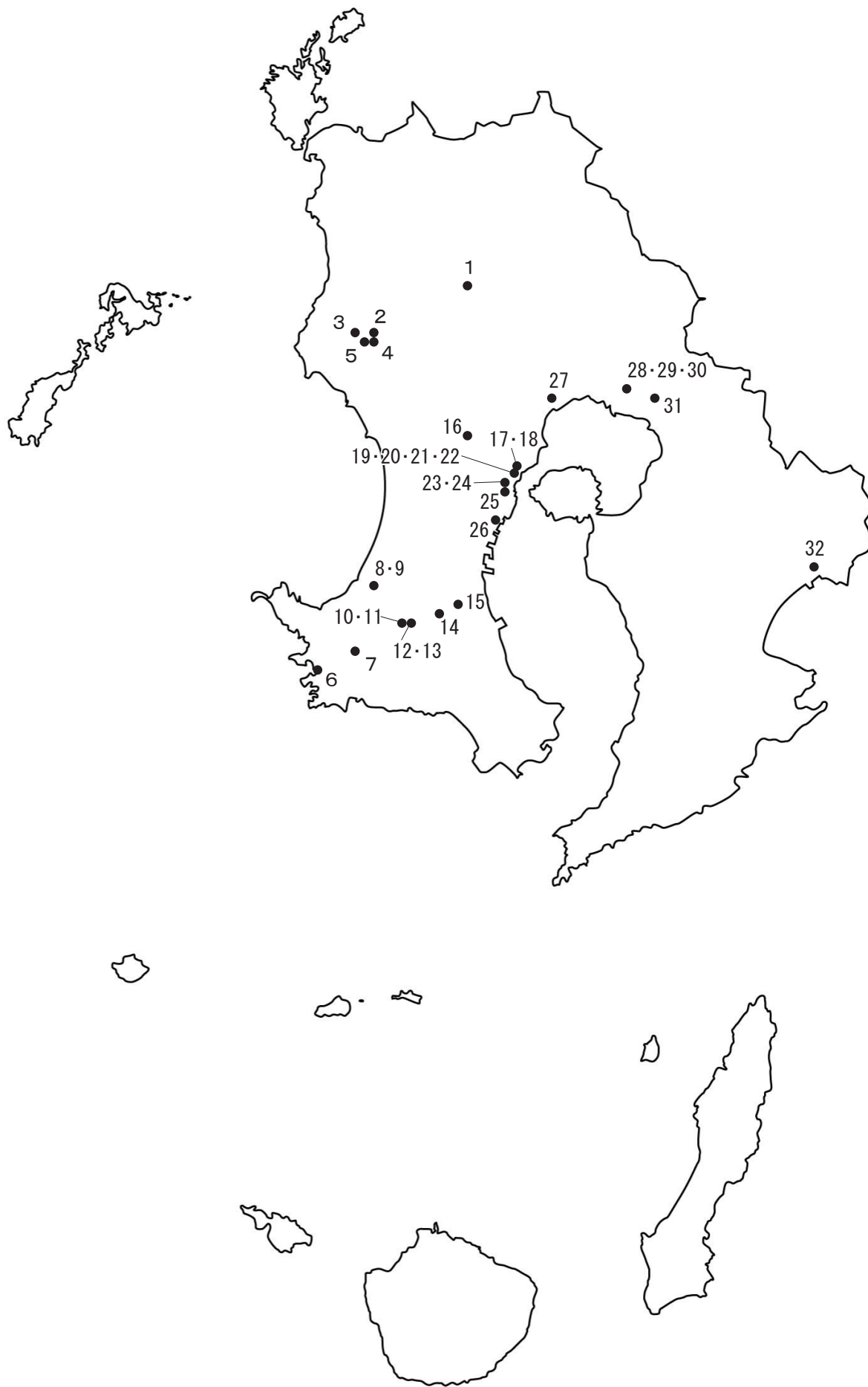
第1図 鹿児島県内出土の硯実測図(1)



第2図 鹿児島県内出土の硯実測図(2)

①阿久根

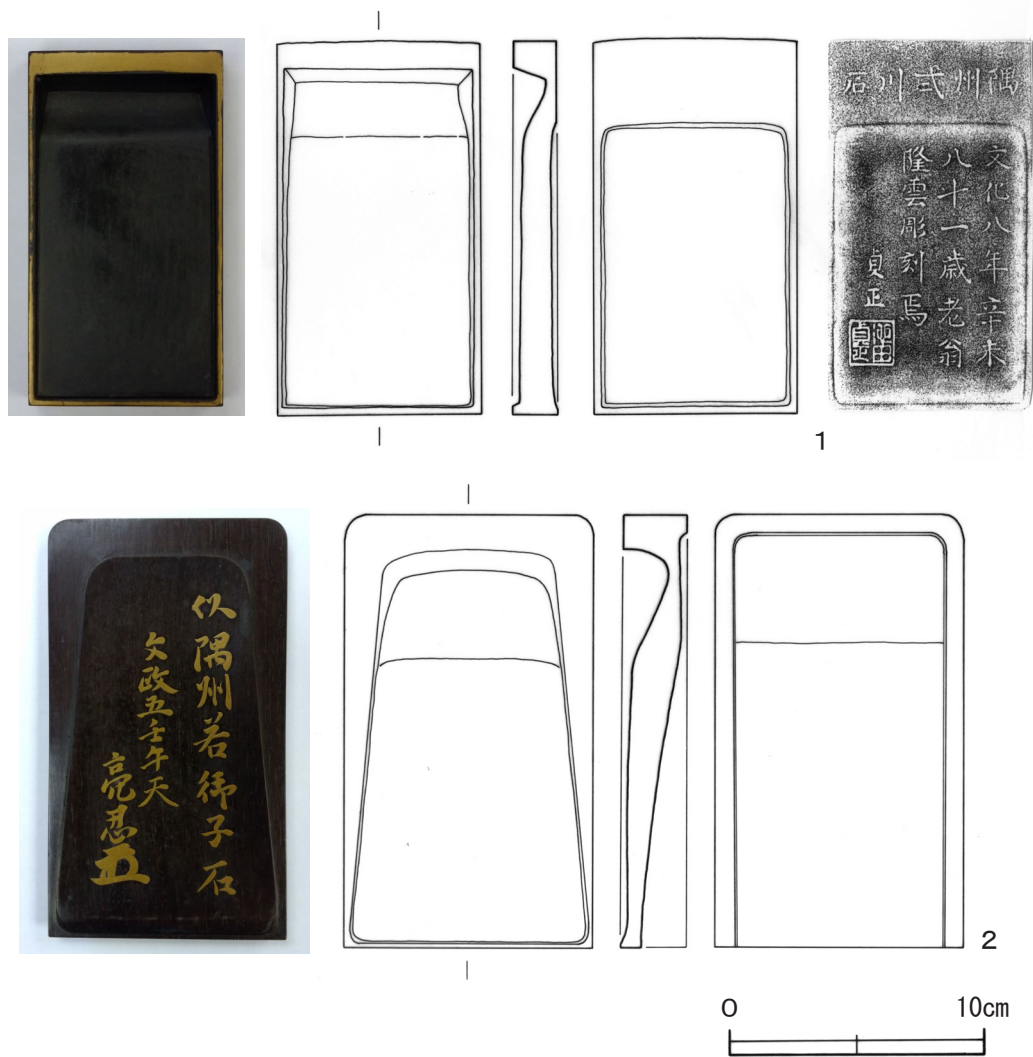
卷15に「山下の内、鞆山に出づ」とある。



第3図 鹿児島県下の中世以降の硯出土遺跡地図

遺跡番号	遺跡名	所在地	資料番号	色調	特記事項
1	諏訪原遺跡	薩摩郡さつま町柏原	1	青灰色系	刻書あり
2	鶴ヶ岡城跡	薩摩川内市東郷町斧刈城内	2	赤紫系	
3	麦之浦貝塚	薩摩川内市陽成町本川	3	その他	滑石製
4	鍛冶屋馬場遺跡	薩摩川内市平佐町	4	黄褐色系	
			5		磁器
5	川骨遺跡	薩摩川内市高江町	6	青灰色系	
			7	赤紫系	
			8	赤紫系	
6	一乘院跡	南さつま市坊津町坊	9	その他	
			10	その他	
7	春ノ山遺跡	南さつま市加世田津貫春ノ山	11	青灰色系	
			12	赤紫系	
8	持鉢松遺跡	南さつま市金峰町宮崎	13	黄褐色系	17世紀を中心
			14	赤紫系	
9	上水流遺跡	南さつま市金峰町花瀬	15	赤紫系	
			16	赤紫系	
			17		
10	川辺郷地頭仮屋跡	南九州市川辺町平山	18	黒褐色系	縁のみ残存
			19	黒褐色系	
			20	その他	
11	平山城跡	南九州市川辺町平山天神	21	黒褐色系	
			22	その他	
12	馬場田遺跡	南九州市川辺町両添	23	赤紫系	刻書「赤間関」
			24	黄褐色系	
13	高付遺跡	南九州市川辺町野崎	25	黄褐色系	
			26	赤紫系	刻書「赤間関」 「美代、直熊一」
14	知覧城跡	南九州市知覧町永里字城内	27	青灰色系	刻書あり
			28	青灰色系	刻書あり
			29	青灰色系	転用穿孔太沈線あり
15	厚地松山製鉄	南九州市知覧町厚地伊場	30	青灰色系	
			31	黒褐色系	刻書「天保八年酉六月日千蔵氏」
16	地頭仮屋跡	鹿児島市郡山町	32	黄褐色系	刻書「中村八兵衛」
			33	黒褐色系	
			34	青灰色系	
			35	青灰色系	並行線
			36	黄褐色系	
			37	赤紫系	
			38	赤紫系	刻書「赤間関」
			39	黒褐色系	
17	若宮遺跡 D 地点	鹿児島市池之上町	40	赤紫系	
			41	青灰色系	刻書「赤間関」
			42	青灰色系	
			43	黒褐色系	
18	大龍遺跡	鹿児島市大竜町	44	赤紫系	
			45	青灰色系	
			46	青灰色系	
			47	赤紫系	刻書「赤間関」
			48	赤紫系	刻書「赤間関」
			49	青灰色系	刻書あり
			50	赤紫系	
19	浜町遺跡	鹿児島市浜町	51	青灰色系	刻書あり
			52	赤紫系	
			53	青灰色系	刻書「十二月十五日」
			54	黄褐色系	
			55	黒褐色系	刻書「本高嶋石 中村八兵衛」
			56	青灰色系	
20	鹿兒島城本丸跡	鹿児島市城山町	57	黒褐色系	
			58	黒褐色系	
			59	赤紫系	
21	鹿兒島城二之丸跡	鹿児島市城山町	60	黒褐色系	師範学校関連
			61	黒褐色系	師範学校関連「大正拾貳年」ほか
			62	黒褐色系	師範学校関連 個人名ほか
			63	その他	
			64	赤紫系	
			65	黄褐色系	
			66	黒褐色系	
22	垂水・宮之城島津家屋敷跡	鹿児島市山下町	67	赤紫系	
			68	青灰色系	
23	西田橋	鹿児島市西田町	69	黄褐色系	
			70	黒褐色系	12世紀後半～13世紀初
			71	黒褐色系	
24	武遺跡 II 地点	鹿児島市武1丁目	72	黒褐色系	絵画状線刻
			73	赤紫系	
25	寿国寺跡	鹿児島市武2丁目	63	その他	
26	北籠遺跡	鹿児島市谷山中央1丁目	64	赤紫系	
27	森遺跡	始良市宮島森	65	黄褐色系	
			66	黒褐色系	
			67	赤紫系	
28	弥勒院跡	霧島市隼人町神宮3丁目	68	青灰色系	
29	桑幡氏館跡 II	霧島市隼人町神宮2丁目	69	黄褐色系	
30	宗門坊屋敷跡	霧島市隼人町神宮3丁目	70	黒褐色系	12世紀後半～13世紀初
31	妻山元遺跡	霧島市国分中央2丁目	71	黒褐色系	
32	志布志城跡	志布志市志布志町帖	72	黒褐色系	絵画状線刻
第4図	玉里島津家資料	隅州式川石	1	黒褐色系	長軸150mm×短軸80mm×縁18mm, 426g
			2	黒褐色系	長軸170mm×短軸98mm×縁26mm, 638g

表1 鹿兒島県内の硯一覧表



第4図 玉里島津家資料実測図

②牛根

卷44大隅國大隅郡牛根に、「二川村，早落の崙に産す，安永中，櫻島燃の以後洪水にて早落しの崙，松崎川中に崩墜たりしに，其崙高さ二百餘にして，皆硯となすべきの石なり，此三四十年以前より，始めて其石を取て硯に造る，屢公用となる，其石紫色にて金色の文理あり，或は銀色の文理あり，脉理密にして玉の如し，硯に製して甚上品なり，然れども石性稍堅剛にして，石工頗る攻めがたしとぞ，又硯石，同村の海濱浮津といふ浦に産す，其石性柔軟にして，品位稍劣れり，」とあり，二川村と近接する浮津の2カ所に産出地があることや，しばしば公用となる，すなわち，生産体制と納品先や工人を想像させる記述が見られる。

③田代

卷46に、「大弥田村川河原小路山に産す。この山周廻半里程，雑樹生茂れる。硯石は地を掘ること三四尺にして得べし。その質黯黒，性稍堅剛なり。山辺には硯石の類多く地上に布けり。然れども地上に露出する者は，用いるに堪へず」とある。

#### ④佐多

卷46に、解説文はなく硯石と記され、続けて「みかげ石邊津加村富良山に産す」とあり、これは花崗岩を指しているものと思われる。

#### ⑤屋久島

卷50大隅國馭謨郡屋久島に、「宮之浦・楠川の両村に産す、大小あり、大なる者は破りて製す、或は小石の渚邊にある者、波に穿たれ巖穴など有て、天然の形状甚奇なる者ある故、是を以て製するもあり」と、島内に産地が2カ所あることが記されている。

#### ⑥志布志

卷60に、「御在所嶽に産す」とある。

### (2) 鹿児島県史料

鹿児島県史料斉彬公史料第三卷には、「篤姫君將軍家結婚ノ際国産ノ大硯献呈ノ事実」とあり、天璋院篤姫が輿入れする際に、養父島津斉彬が製作させた記録がある。薩摩川内市甕島の冷泉石がその産地である。しかし、三国名勝図会に産地としては紹介されていない。

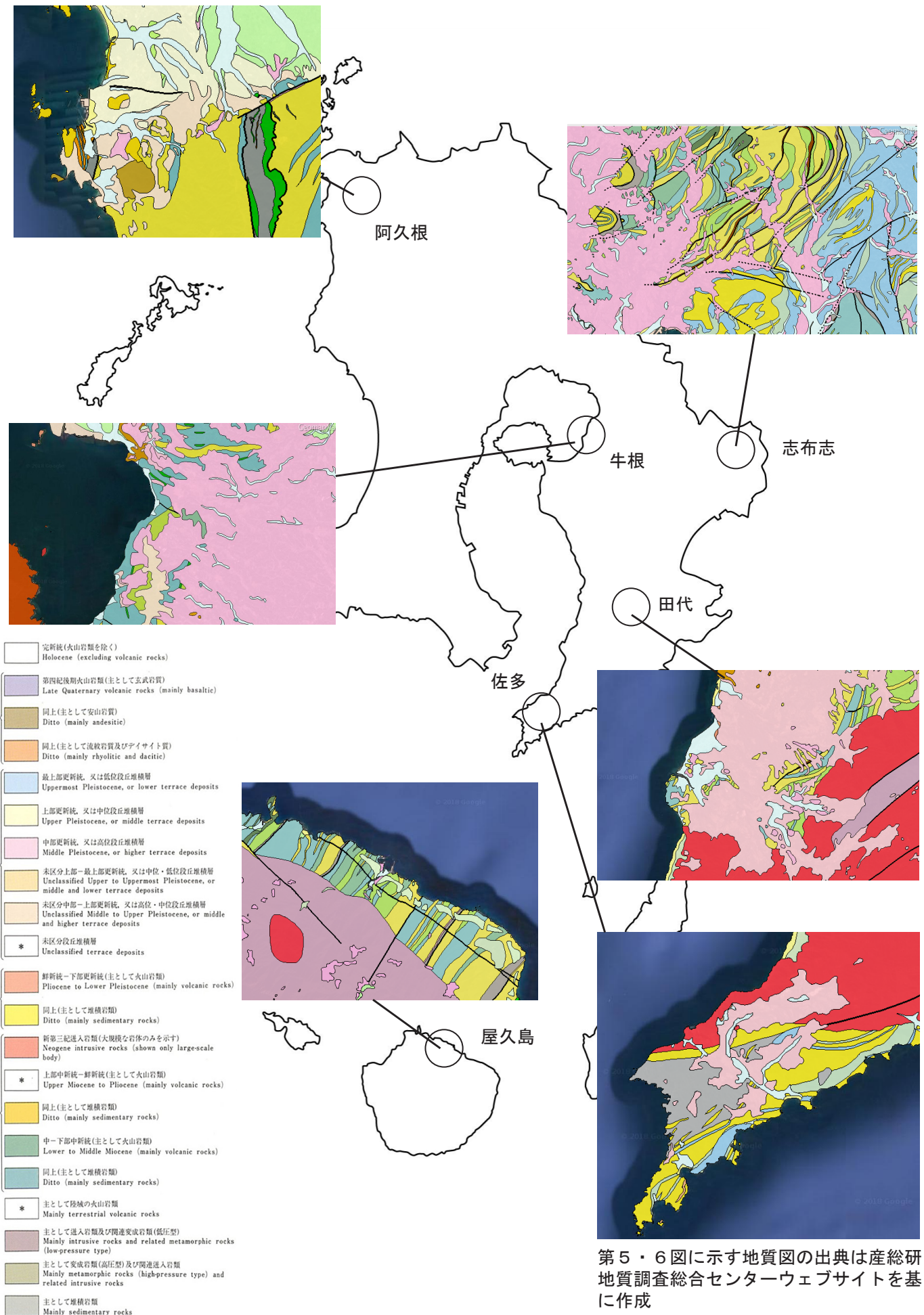
## 4 硯の生産と流通について

まず、三国名勝図会に記された場所周辺の地質を見ていきたい。第5図は、該当地域周辺の地質図である。これで見ると、堆積岩が分布している事が分かり、原産地となり得る条件を満たしていると言えよう。すなわち、玉里島津家資料である隅州武川産硯は、三国名勝図会と地質図の両者から見ても産地として妥当と考えられるのである。これは、石器としての基準資料として捉えることが可能なのである。だが、これらの地において、硯製作に関する文書や生産を裏付ける遺跡等は今回の作業で確認する事が出来なかった。この点に関しては、伝聞等も含め丹念に調査していく必要がある。隅州若御子産硯はどうであろうか。第6図に示した地質図で見ると、現在の若尊鼻のものには堆積岩は確認できず、やや南下した辺りから前出の浮津・牛根にかけて堆積岩の分布がある。このことから、三国名勝図会による浮津・牛根の一群に玉里島津家資料2も含めて解釈できるのではないだろうか。

次に、発掘調査資料について分類してみたい。形態について水野氏の分類で見ると、資料のほとんどが長方硯である。ここでは、弥栄氏の行った色調分類を基に、可能な限り実見を行い、肉眼観察により大きく赤紫系・黄褐色系・青灰色系・黒褐色系の4つの系統に分類し、判断できなかったものはその他とした<sup>(3)</sup>。

赤紫系は、いわゆる赤間関産を含む。背面にやや強い掘り込みで赤間関と刻書される資料が多い。赤間関産の硯については、原田倫子氏により広域的に論究がなされている(原田2005)。原田氏の作業は、九州南部に及んでいないようだが、藤木氏の指摘や長野氏の報告などにより、鹿児島県域においても出土していることが分かっている。今回の集合作業によっても表1に示したとおり、鹿児島県内に分布を確認出来、藤木氏の宮崎の事例と併せて南九州においても確実に流通していることが改めて把握された。その論拠の1つとして刻書があるが、その筆跡については、先細の鉄製工





第5・6図に示す地質図の出典は産総研地質調査総合センターウェブサイトを基に作成

第5図 三国名勝図会に記された場所周辺地質図

具により落書きともとれるような刻書もあることから、生産者による刻書以外に、流通の過程において線刻されたことも想定しておきたい。

黄褐色系としたものの中には、木目状の縞模様のある石材もあり、天草地方産出の石材に酷似している。先行研究として、すでに藤木氏により硯としての天草石使用が指摘されている。地頭仮屋跡は出土している2点共にこの石材を用い、浜町遺跡の32・36も同様である。特に、25と36は大型の硯で重量も1kg以上あり、他県での事例<sup>(4)</sup>に留意しておきたい。また、桑幡氏館跡出土の69は、黄褐色系に分類したが、前出のものとは異なり、石材は凝灰岩



第6図 若尊鼻周辺地質図（凡例第5回に同じ）

と思われる、加治木・始良地区で石造物等に用いられるものに類似している。桑幡氏館跡は、この地域に隣接しており、これがこの周辺の特徴なのか、類例の増加を待ちたい。

青灰色系は、滋賀県で産出される高島石を含む一群である。赤紫系には力強い印象の刻書が多いが、高島の銘が記されている資料は少ない。まとまった事例としては鹿児島（鶴丸）城二之丸跡がある。

黒褐色系としたものには、玉里資料の2点も含まれる。発掘調査資料では、細かく見るとやや灰色を帯びているものなど複数の石材を包括しており、将来細分が出来るものと思われる。また、他県の資料について精査しなければならないが、玉里資料を1つの根拠に、おおよそ在地産を含む一群として捉えておきたい。なお、垂水・宮之城島津家屋敷跡出土資料56は色調からここに分類したが、裏面の線刻には留意が必要である<sup>(5)</sup>。

さて、今回困難であった作業の1つに、時期判断がある。多くの資料が包含層あるいは調査区一括資料であり、明確な共伴資料を有していない。特に、中世の硯を抽出することは難しい。現時点では、中世と近世とを明確に区分できる状況に乏しいが、2つの遺跡の事例が有効と思われる。1つは霧島市宗円坊屋敷跡14号土坑出土資料である。松喰鶴鏡などと共に出土している70は、12世紀後半から13世紀初頭の年代観が与えられている。もう1つは、持躰松遺跡出土資料12である、赤紫系の色調で剥落が大きく認められるが、縁に段を有し陸から海へ直線的な傾斜が印象的である。両者を見ると縁に段を有していることがわかるが、この特徴が時期区分の指標となり得るのか、事例の増加を待ったのちに改めて検討したい。近代に位置づけられるものは、武遺跡出土資料60～62である。いずれも黒褐色系石硯で、刻書も大正の年号と個人名が記されており。報告書においても鹿児島県師範学校に関連するものと指摘されている（藤井ほか編2010）。

今回の集成作業においては、再加工品なども散見された。川骨遺跡出土の6は、擦切技法により折割した上に中央上部に穿孔を施しており、温石の形状に類似しており注目される。森遺跡では、未報告ながら赤紫系と黒褐色系の剥片とが出土している。遺構や他の遺物との関係性は不明だが、再加工に関連する可能性が考えられる資料として紹介しておきたい。また、裏面や側面への人名や日付、落書きともとれる不規則な文字や文字列などを有している資料もあり、改めて述べるまでもないが入念な観察が求められる。

## おわりに

これまで見てきたように、鹿児島県下における硯の石材産地は文献に示されているように複数箇所ある。少なくとも玉里島津家資料の2点については産地が特定できる資料と言え、発掘調査資料の黒褐色系硯は牛根や敷根等の在地石材を用いた可能性が考えられるに至った。加えて、赤間関石や高島石といった広域流通品も確認する事が出来、当該期における在地産硯と非在地産硯という流通の重層性も臆気ながらわかった(第7図)。その一方で、石切場や作業場、工人やその道具などの生産に関わる資料や、流通を示す文献等を抽出することは出来なかった。これらの課題を解決するためには、考古学のみならず多方面からのアプローチが必要不可欠である。

集成作業を通して、硯が出土している遺跡は必ずしも多いとは言えない状況も見えた<sup>(6)</sup>。出土遺跡も、城や寺院、上級館あるいは藩営施設などに限られる傾向にあるが、これは、発掘調査の対象が必ずしも近世村落を網羅しているわけではないという実態があろう。中世以前の遺跡においてその上層で対象となった場合や、近世の遺跡として地域において重要とされたものに限られている以上、わずかな断片と捉えておく必要があり、今後解決手法について考えていかななくてはなるまい。

硯は石器である。今後は、遺跡資料と伝世資料の両者を丹念に調査し、当時の様相や生産と流通の実態解明へと繋げていけるよう精進していきたい。



第7図 鹿児島と広域流通石材産地

末筆ながら、小稿を執筆するに当たり多くの方々より御教示をいただいた。末筆ながら感謝したい。

有川孝行 市村哲二 上田 耕 大木公彦 小倉浩明 上村純一 上村俊洋 相美伊久雄

新地浩一郎 坂元祐己 前 幸男 竹森友子 中島哲郎 長野陽介 橋口 亘 東 和幸  
兵頭 勲 藤木 聡 松崎美咲 宮下 愛 村原政樹 山元亜由美 吉本明弘

## 註

- (1) 「火打石や硯といった石製の生活財については、陶磁器の生産や流通をめぐる研究が数多い一方で、基礎資料である発掘調査報告書でも偏った掲載となっている場合が多い現状がある」との指摘がある（藤木2012）。
- (2) 国分敷根に若獅子は見当たらない。小稿で取り上げる若御子、すなわち現在用いられている若尊の事で、誤植であったのではないだろうか。
- (3) 規格については、「タビ硯」や「四平」・「四五平」などがあるが、今回は言及していない。
- (4) 砥石として利用される石材の硯への使用は、番町遺跡2次調査第1文化層出土の硯（梅木・兵頭編2008）について、伊予砥の屑石が硯として利用されていると指摘されている（石岡2008）。
- (5) 報告書では、「宮嶋」と解説したが、改めて観察したところ、「高嶋」ではないかと考えるに至った。
- (6) 出土例が少ないのは、藤木氏の指摘のとおりであろう。使用による消耗や欠損が比較的少ない石器であり、頻繁に補填や補充されるものではない点が出土事例の少ない要因にもつながっていると考えられる。

## 引用・参考文献

- 青崎和憲編（『浜町遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（25），2000年）鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 青崎和憲ほか編（『西田橋移設復元工事報告書』，2000年）鹿児島県土木部
- 有川孝行ほか編（『地頭仮屋跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（44），2006年）鹿児島市教育委員会
- 有馬孝一編（『高付遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（189），2017年）鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 石岡ひとみ（『掘り出されたえひめの江戸時代～くらし百花繚乱～』，2008年）愛媛県歴史文化博物館
- 石川二男（『和硯のすすめ』，1985年）日貿出版社
- 上田耕ほか編（『国指定知覧城跡（三）』知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書（12），2006）知覧町教育委員会
- 上田耕ほか編（『馬場田遺跡』南九州市埋蔵文化財発掘調査報告書（3），2009年）南九州市教育委員会
- 上東克彦ほか編（『春ノ山遺跡ほか』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（22），2002年）加世田市教育委員会
- 梅木学・兵頭勲（『番町遺跡2次』，2008年）財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 大窪祥晃ほか編（『志布志城跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（12），2018年）志布志市教育委員会
- 上之園建二ほか編（『寿国寺跡・梅落遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（40），2002年）鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 川口雅之ほか編（『鍛冶屋馬場遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（39），2002年）鹿児島県立埋蔵文化財センター

川添俊行ほか編（『諏訪原遺跡』宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書（6），1995年）宮之城町教育委員会  
鹿児島県維新史料編さん所編（『鹿児島県史料 斉彬公史料第三巻，1983年』）鹿児島県  
黒川忠広編（『垂水・宮之城島津家屋敷跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（48），2003年）  
鹿児島県立埋蔵文化財センター  
青潮社（『三国名勝図会』，1982年）  
重久淳一ほか編（『桑幡氏館跡Ⅱ－第1・2・4・5次調査－』霧島市埋蔵文化財発掘調査報告書，2006年）  
霧島市教育委員会  
重久淳一ほか編（『弥勒院跡－遺物編－』霧島市埋蔵文化財発掘調査報告書（8），2010年）霧島市教育委員会  
重久淳一ほか編（『宗田坊屋敷跡』霧島市埋蔵文化財発掘調査報告書（16），2012年）霧島市教育委員会  
知覧町教育委員会（『厚地松山製鉄遺跡の発掘調査成果について平成7年8年度分の調査から』『ミュージアム知覧  
ム知覧紀要』第3号，1997年）ミュージアム知覧  
鶴田静彦ほか編（『川骨遺跡ほか』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（165），2011年）鹿児島県  
立埋蔵文化財センター  
戸崎勝洋ほか編（『一乗院跡』坊津町埋蔵文化財発掘調査報告書（1），1982年）坊津町教育委員会  
中島哲郎ほか編（『麦之浦貝塚』，1987年）川内市土地開発公社  
長野陽介編（『若宮遺跡D地点』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（73），2014年）鹿児島市教育委員会  
名倉鳳山（『日本の硯』，1986年）日貿出版社  
抜水茂樹ほか編（『持松遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（120），2007年）鹿児島県立  
埋蔵文化財センター  
原田倫子（『近世・近代遺跡出土の赤間銘のある硯について』『考古論集-川越哲志先生退官記念論文集-』，  
2005年）川越哲志先生退官記念事業会  
藤井大祐ほか編（『武遺跡H地点』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（60），2010年）鹿児島市教育委員会  
藤木聡（『中世・近世における日向の硯とその特質』『宮崎考古』第22号，2010年）宮崎考古学会  
藤木聡（『近世における阿波大田井産チャート製火打石の流通』『故福田一志氏追悼論文集西海考古』第8号，  
2012）西海考古同人会  
本田道輝ほか編（『大龍遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（7），1986年）鹿児島市教育委員会  
弥栄久志ほか編（『平山城跡』川辺町埋蔵文化財報告書（1），1984）川辺町教育委員会  
弥栄久志編（『鹿児島城二之丸跡（遺物編）』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（60），1992年）鹿児島県教  
育委員会  
水野和雄（『日本石硯考－出土品を中心として－』『考古学雑誌』第70巻第4号，1985年）日本考古学会  
溝口学ほか編（『上水流遺跡2』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（121），2008年）鹿児島県立  
埋蔵文化財センター  
峯崎行清（『妻山元遺跡』国分市埋蔵文化財発掘調査報告書（1），1985年）国分市教育委員会  
宗岡克英編（『森遺跡ほか』，鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（55），2003年）鹿児島県立埋蔵  
文化財センター  
吉留正樹編（『北麓遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（79），2017年）鹿児島市教育委員会

米森祐太編（『鶴ヶ岡城跡』薩摩川内市埋蔵文化財発掘調査報告書（10），2016年）薩摩川内市教育委員会

若松重弘編（『川辺郷地頭仮屋跡』南九州市埋蔵文化財発掘調査報告書（4），2010年）南九州市教育委員会

（くろかわ ただひろ 本館専門員）